

辻村みちよ 生涯と業績

西暦(M: 明治, T: 大正, S: 昭和)

- 1888 (M21) 9月17日, 辻村甚太郎, つねの三男四女の二女として埼玉県足立郡桶川町(現 桶川市)で誕生.
- 1902 (M35) 桶川尋常小学校卒業.
埼玉県教員検定試験合格, 准訓導.
- 1904 (M37) 加納尋常小学校勤務.
- 1909 (M42) 東京府立女子師範学校卒業.
- 1913 (T2) 3月, 東京女子高等師範学校理科卒業.
4月, 神奈川横浜高等女学校教諭.
- 1917 (T6) 9月, 埼玉女子師範学校教諭.
- 1920 (T9)
(32歳) 9月, 北海道帝国大学副手 (当時北大では女子の入学は正科に許されていなかったの
で無給副手となる) 食品栄養研究室に入り, 近藤金助先生の指導を受けた。家蚕の栄
養について着手した.
- 1922 (T11) 家蚕の栄養についての第一報を札幌農林学会報12に報告し, 1923年続報として同学会
報に第二報が掲載される.
4月, 近藤先生は辻村の家庭の事情を考慮して東京で研究を続けられるように配慮し,
東京帝国大学医学部医化学教室において柿内三郎教授のもとで生化学の研究を続けるこ
とが出来た.
- 1923 (T12) 9月1日に起きた関東大震災の際に実験中だった辻村は科学天秤だけを抱えて建物の外
に飛び出した。次の日きちんと袴をはいて研究室に行ったと伝えられている。この大
震災で医化学教室は全焼し, やむなく辻村は理化学研究所に移った。
10月, 理化学研究所研究生となり農学博士鈴木梅太郎研究室にて食品化学, 栄養化学,
生物化学の研究を行う.
- 1924 (T13) 鈴木梅太郎の研究室で三浦政太郎と共にビタミンCの研究を始めた。
「緑茶中のビタミンCに就て」を日本農芸化学会誌に三浦政太郎と共同で報告し日本
の緑茶中にかなりのビタミンCが含有することを初めて発表した。その結果, 日本茶の
北米向け輸出量は大きく増加した。当時ミッチェル博士(H. S. MITCHEL)が「日本茶にビ
タミンCは含まれていない」という内容の論文を出したので, 辻村は再び抽出実験を行
い, 緑茶の抽出法の違いを示して緑茶中にビタミンCが含まれていることを立証した。
- 1926 (T15) 大根の絞り汁を原料として, また夏みかん果汁を材料として, ビタミンCの分離及びそ
の化学的性質について第一報を, 更に1927年に第二報を理研彙報に報告した。ビタミン
C欠乏症のモルモットを使い, その治癒量を測定する方法で研究を進めた。
- 1929 (S4) 緑茶中の渋味成分, カテキンを初めて分離し, SCI. PAP. I. P. C. R. 10. に発表した。
- 1930 (S5) 緑茶中より, カテキンより渋味の強いタンニンを無定形にて分離し, SCI. PAP. I. P. C. R.
14. に発表した。

- 1931 (S6) 茶のタンニンの構造について、茶のタンニンはカテキンに渋食子酸がエステル状に結合したものであることを合成的に証明し、Sci. PAP. I. P. C. R. 15. に発表した。
- 1932 (S7)
(43歳) 緑茶中のカロチンとステリンについてSci. PAP. I. P. C. R. 20. に報告した。
6月、大量の緑茶から得た茶湯を煮詰めては化学的操作を繰り返し、ごくわずかな結晶を得るといふ根気の要る研究を続けて報告した「緑茶の化学成分について」の論文が高く評価され、東京帝国大学より農学博士の学位を与えられた。日本初の女性農学博士が誕生した。
- 1934 (S9) 緑茶中から新しい種類のカテキンであるガロカテキンを得てSci. PAP. I. P. C. R. 24. に報告し、鈴木博士の指導で英文の論文を次々と発表することで世界的に辻村の緑茶の研究について高く評価された。
- 1935 (S10) 緑茶からタンニンを結晶で取り出し、Sci. PAP. I. P. C. R. 26. に報告した。

植物体より結晶ビタミンCを製造する方法について特許取得、特許公告No. 2544(理化学研究所)

茶業組合50周年記念論文集に緑茶より分離したカロチンについて記す。
- 1937 (S12) 緑茶からバラ-クマールックアシドを得た。Sci. PAP. I. P. C. R. 32. に報告する。
- 1938 (S13) 緑茶から α, β -ヘキセナールを分離し、報告をSci. PAP. I. P. C. R. 34. に出した。
- 1940 (S15) 緑茶中に相当量のフラビン(ビタミンB₂)を含むことを動物飼育実験と定量法とで証明し(赤穂たみ、佐々木ひで)、理研彙報19.に報告した。
- 1941 (S16) 緑茶からエラグタンニンを取り出し、更にフラボン色素クエルセチン、ケンペロールについて、Sci. PAP. I. P. C. R. 38. に報告した。
- 1942 (S17) 理化学研究所副研究員となる。
- 1943 (S18) この頃より他の植物のタンニンについて研究した。当時は極度の食糧難であったので、かしのどんぐりを食用とするために、しらがし果実のタンニンについて研究し、理研彙報22.に報告した。
- 1946 (S21) 2月、女子学習院講師となる。
- 1947 (S22) 5月、理化学研究所研究員となる。
- 1949 (S24)
(60歳) 8月、お茶の水女子大学教授となる。
お茶の水女子大学の発足時に辻村が教授として赴任したことで、学生は食物学科のスタートを喜びをもって迎えた。
- 1950 (S25) 4月、お茶の水女子大学教授 兼 東京女子高等師範学校教授
理家政学部が理学部と家政学部に分かれ、初代家政学部長となる。
- 1951 (S26) 1月、大学施設運営視察の為渡米。4月16日まで、
大学設置審議会委員となる。
カラコギカエデの葉を染色用にする實際上その成分を研究し、結晶性のタンニンを得て、お茶の水女子大学自然科学報告2.に報告した。

- 1952 (S27) 3月, 東京女子高等師範学校の廃止により同高等師範学校教授の兼職を解除。
「体に必要なのは海藻である」という考えから, 北海道で海藻を採取し, 海藻成分の研究
第一報に海藻中のフラビンに関する研究を田部井, 和田と共に日本農芸化学会誌26に
報告した。
- 1953 (S28) 昆布のフラビンその他の成分について第一報で海藻中のフラビンの存在を認めたの
で, 更に動物試験でその有効性を認め, 当時食品化学研究室の山西助教授, 吉松助手と
共にお茶の水女子大学自然科学報告4. に報告した。
10月, お茶の水女子大学評議委員併任。
- 1955 (S30) 緑茶よりテイタンニンⅡを結晶で分離し, 緑茶中のタンニンを全部分離し完成させ,
日本農芸化学会誌29. 407に発表した。
1月, 大学設置審議臨時委員に任命される。
3月, お茶の水女子大学退官。(1961年まで非常勤講師を続ける)
4月, 実践女子大学教授となる。
- 1956 (S31) 緑茶の成分に関する研究により日本農学賞を受ける。
- 1959 (S34) 緑茶の単寧物質について, 融点の異なるテイタンニンⅡの存在を認め, テイタンニンⅡ
の誘導体を作り, 日本農芸化学会誌33. 914に発表した。
- 1960 (S35) 各種の日本緑茶中に存するタンニンの状態についてPROC. JAPAN. ACOD. 36. に報告する。
- 1961 (S36) 製茶の際の蒸した茶葉と製茶用の生葉中のタンニンについてPROC. JAPAN. ACOD. 37. に
報告する。
- 1963 (S38) 茶の成長に伴う茶生葉中のタンニン物質の生態についてPROC. JAPAN. ACOD. 39. に報告
する。
3月, 実践女子大学定年退職。
4月, 実践女子大学名誉教授となる。
- 1965 (S40) カラコギカエデの葉の成分について第二報PROC. JAPAN. ACOD. 39.
- 1967 (S42) 茶の渋みについて化学と生物に報告。
- 1968 (S43) 勲四等宝冠章を授与される。
園遊会に招待される。
- 1969 (S44) 6月1日, 豊橋の姪の家で逝去。
(81歳) 同日, 従五位に叙せられる。
- 1981 (S56) 9月, 豊橋の姪の家の庭に「滋味」と先生の字の刻まれた式紙碑をお茶の水女子大学研究
室関係者と実践女子大学「桂会」の人達とで建立した。